



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより5月号2012

新シリーズ

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える

を始めるにあたって



今月の予定

聖歌練習 半田 5月16日(水)12時ごろから

名古屋今月はお休み。毎聖体礼儀後のミニ練習は行います。

名古屋指揮当番

6日エレナ広石 13日ピーメン松島 27日マリア松島

伝統と生活 <復活祭の紅玉子>

正教会は伝統的な教会と言われます。

復活祭の夜、赤く染めた玉子やケーキを盛ったバスケットを抱えて信徒が薄暗い聖堂に集まってきます。ロウソクに先導された行列とともに外を一巡りして戻れば、真っ白な祭台がシャンデリアの光にまばゆく輝きます。「ハリストス死より復活し、死を以て死を滅ぼし、墓に在るものに生命を賜えり」と復活の歌が繰り返し歌われます。世界中の正教会で行われる昔からの伝統です。

正教会は使徒時代からの伝統を保っていると言われます。しかし、紅い玉子もシャンデリアも復活のトロパリも聖書は伝えておらず、使徒たちのころにはなかったかもしれません。十字行は4世紀以降ビザンティン時代に宮廷儀礼から始まり、今歌われている聖歌の大半は7-8世紀頃までにビザンティンの大聖堂や修道院で作られたもので、まして日本で歌われている合唱聖歌は18世紀のロシアのものでした。

しかし使徒時代や聖書になれば「まがい物」でしょうか。今ある伝統は後代の異文化の影響で変質してしまった「偽物」でしょうか。

正教会では伝統を信仰生活全体を含む「生きた」一体と

紅玉子の伝説

実は、復活祭の紅玉子にはこんな伝説があります。主の女弟子の一人マグダラのマリアは、あるときローマ皇帝に玉子を献上しました。皇帝は「イイススの復活だと？あなたたちはそんな馬鹿げたことを信じているのか。この白い玉子が紅くでもなったら信じてやろうではないか。」すると、みるみるうちに玉子が紅くなったというお話です。

玉子は生命の象徴、赤は生命の源である血の色です。いつ頃からかわかりませんが、キリスト教会では東西を問わず古くから復活祭の祝いに玉子を用いてきました。長い齋期間の禁食の後の玉子は何よりのご馳走でした。西方教会では齋前の肉の食べ尽くしのイベントである謝肉祭(カーニバル)は盛んでも、齋の禁食はあまり行われなくなっていました。

礼拝と結びついた禁食は、悔い改めを促し、祝いの気分を何倍にも拡大します。正教会には年4回の齋があります。



してとらえます。聖書、教義、公会議の記録、聖師父の著作、礼拝を聖伝として特に重要視しますが、聖書だけを取り出して絶対視したり、他の要素と対立させたりすることはありません。伝統の諸要素は神が啓示された同じ真理を異なる角度から明かすもので、二千年の教会の実体験の中で聖神^①の導きと愛による人の働きによって具体化されてきたものです。

礼拝は信仰生活の中心です。日曜日や祭日を中心とする教会暦は信仰生活のリズムを作り、聖書に書かれた事実を自分のこととして体験させ、その恵みはさまざまな習慣を通じて生活へと広げられます。復活祭の6週間前、大齋(四旬齋/四旬節)が始まると教会では長い祈りが始まります。歌の少ない、読みばかりの地味な祈りです。多くの信徒は昔からの習慣に従って、肉や玉子、乳製品を断ち、菜食生活に入ります。復活祭が近づき受難週にはいると、教会ではラザリの復活、主のエルサレム入城、主の足に膏を注いだ女、ユダの裏切り、最後の晩餐、捕縛と受難、葬り、黄泉降りと礼拝の中で主の受難をたどる礼拝が行われます。各家庭では紅玉子を作り、バターやチーズをたっぷり使ったケーキを作って祭に備えます。

礼拝で得た喜びは聖体礼儀の最後の挨拶「平安にして出ずべし」の祝福とともに日常生活へと運ばれます。聖水で祝福された玉子やケーキも各家庭の食卓へ持ち帰られ、喜びの輪が広がります。礼拝は礼拝だけで終結しません。生活と結びついた「生きた伝統」が信仰を育む、それが教会の伝統です。

知って祈ろう—奉神礼は面白い



エウハリスティア

感謝の祈り—アナフォラ・聖変化 (3月号からの続き)

—最後の晚餐、機密の晚餐—

我等も此の福たる軍とともによびて曰う、聖なる哉、至聖なる哉、爾と爾の独生子と爾の聖神、聖なる哉、至聖なる哉、爾の光栄は威厳なり、

今教会は天の教会とひとつになり、私たちは主の主権する晚餐の宴会の席についています。天使の軍勢とともに主を讃め揚げて歌います。「聖なるかな、最も聖なるかな。あなたの光栄は偉大です」。



人を愛する主宰や…爾は爾の世界を愛して、爾の独生子を賜うに至り、凡そ之を信ずる者に沈淪を免れて永生を得せしむ、彼来りて、凡そ我等に於ける**定制**を成全し、付されし夜、正しく言へば親ら己を世界の生命のために付し夜、其聖にして至浄無玷なる手にパンを取り、感謝し、祝讃し、成聖し、擘きて其聖なる門徒及び使徒に予へて曰へり、

取りて食え、**是我が体、爾等のために擘かる者、罪の赦しを得るを致す**

同く晚餐の後に爵を執りて

皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び衆くの人のために流さる者、罪の赦を得るを致す

人を愛する主宰よ、あなたはあなたの世界を愛し、独り子を与えてくださいました。彼を信じる者は、滅びを免れ、永遠の生命をいただきます。彼は（この世に）来て、私たちのために神が定められた特別のお計らいを完成されました。ご自分を（十字架に）渡された夜、正しくいえば、ご自分の自由意志で、ご自分を世界の生命のために渡された夜、（弟子たち徒の晚餐の席で）、聖なる手、最も浄く傷のない手にパンを取って、感謝して、それを祝福し、成聖して、（パンを）割いて、聖なる信徒と使徒たちに、こう言って与えました。

これを食べなさい。これは私の体です。あなたたちのため、罪の赦しのために割かれたものです。

みな、これを飲みなさい。私の新しい契約の血、あなたたちとすべての人々のため、罪の赦しのために流されるものです。

KEY WORD 「定制」 οἰκονομία dispensation

英語ではdispensationで、ふつうは神の摂理と訳されます。原語のギリシア語は「オイコノミア」で、もともとは家計のやりくりを表し、エコノミーの語源になったことばで、原則に外れることだけれども、特別のはからいで減免することを表します。神は人を愛し、どうしても人を滅びから救いたかった。だから、本来ありえないことだけれども、神が人となってこの世に生まれ、罪の赦しのために十字架にわたされる夜、世のいのちのために渡される夜、晚餐の席で、感謝（エウハリスティア）という名の儀式を弟子たちに授けました。「聖体礼儀」はそのエウハリスティアの継承です。

参考文献

『奉神礼』『教義』トマス・ホプコ著、西日本主教教区発行(教義は未発行)
『ユーカリスト』A.シュメーマン著、新教出版社

??ギリシア語??

新約聖書や正教会の祈祷書はもともとギリシア語で書かれ、各国語に訳されて伝道されました。特別の祈祷用語だと思っていることばも、実はギリシアでは日常語のこともしばしばあります。

たとえば、ポティール。私たちは司祭が持つご聖体用の聖爵を思い浮かべますが、実はふつうにコップの意味です。

ちなみにギリシア語の「ありがとう」は「エウハリストー！」私たちは「ありがとう」という儀式を行っていることとなります。



ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料